

花の水彩【三】

花と昆虫

丸山 晚霞

花を描きて、それに生物を添加して、趣味を深くする事がある。譬へば菜花に蝶を配し、藤花に蜂を配するなどで、畫者の注意すべき事である。吾は人々の畫を多く見しとき、折角寫生して出來た畫に、想像にて生物を添加し、その花と生物が適合しないので、折角苦心にて出來た畫もそれが爲めに害してしまふ、かゝる不自然の畫を多く見た、又多くの人は細微の點まで注意せず、描寫するものが多いが、これは實に遺憾の至りである。譬へば早春の花に蜻蛉を配したり、又は揚羽の蝶を配するなどである。これは畫者の注意を缺けるものと思ふ。吾は花と昆虫に就て聊か研究した事がある。早春に咲ける花はすでに述べた通りで、早春の花に來たる昆虫は至て尠い、蜜蜂と胡蝶位である。昆虫には各々保護色のありて、胡蝶は黄色と白色に限られて居る。黄白の花をあさり廻る爲めであらふ。蜜蜂の色はあまり花に似ざれど、自然界の色には宜く似て、その飛びゆくのは吾等の眼にも見えぬ。揚羽の蝶の美しき種類の現はるゝときは、自然界も深緑となり、花も紅紫のものが咲き満ちて居る。その頃は蝶も蛾も、美麗な斑文に美しき色彩を持てるものが多いのである。赤々とした百合花に胡蝶を配したら、如何にも不自然で釣合はぬのである。元來花の咲くといふ目的は、實を結んで繁殖するといふので、花の麗はしき色は昆虫の眼をひきつける爲め、昆虫の媒介に因て結實するのである。昆虫を引きつける事の出來ない、眼にたゞぬ花には芳香が深いので、香に因て昆虫を引きつけるのである。麗はしき色の花程香が尠い、昆虫の媒介にて結實すると、保護色を帯びて昆虫を避け、漸々熟すると黄紅の色を帯び、この色は昆虫又は鳥などを引きよせ、繁殖の媒介を爲さしむるのである。自然界の事、造化の活力、實に驚くの外はない。花に昆虫又は小鳥等の集るのは、季節の花に因て、昆虫迄が違ふのである故、大に注意を要して描かれねばならぬのである。